

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 88

2023年6月

Special to the Newsletter

アメリカスと日本鍼灸をむすぶ『北米東洋医学誌』

田島（山脇）千賀子

2019年4月27～29日、カナダ・バンクーバーにて「北米東洋医学誌 NAJOM 創刊 25周年記念大会」が開催された。当時、私は19年間にわたって奉職した文教大学国際学部教員としてのキャリアをリタイアして、鍼灸あん摩マッサージ指圧師国家資格取得を目指して入学した東京衛生学園2年生として参加した。私は50代になるまで、日本においてラテンアメリカ文化や社会の理解を広めることをミッションとしてきたが、後半生は日本の宝である東洋医学を媒介にして日本とラテンアメリカを架橋していく活動をすることを決意したのだ。

そうした意味で、同上の記念大会は私にとって天啓ともいえる学びの機会。日本鍼灸を世界に普及させるために活躍なさっている著名な先生方のセミナーやデモンストレーションが目白押しという瞠目の3日間。鍼灸学校の先生曰く「これだけの多様なバックグラウンドの先生たちが一同に介した日本鍼灸セミナーは前代未聞」。「何を置いても参加しなくては！」と気持ちが逸った。

『北米東洋医学誌』（NAJOM：North American Journal of Oriental Medicine）の創刊は1994年。バンクーバーを拠点として鍼灸師として活躍する水谷潤治先生が創刊者の一人。水谷先生は1983年に日本鍼灸治療専門学校を卒業後、カナダ・トロントに移り吉川指圧学校で研究を重ねるとともに、指圧スクール・オブ・カナダで東洋医学講座を担当。オンタリオ州指圧協会で3年間会長を務めた。その後、新境地を求めて1992年にバンクーバーに移った経歴を持つ。NAJOM 創刊号の水谷先生による巻頭言では、自身が鍼灸師を目指すことになったきっかけが美しい詩のような描写で記されている。

1979年の夏、ネバダ・シティーの山中に私は一泊した。森の中のキャビンを探し当て、私が訪問したのは、ゲリー・シュナイダー^(ママ)と言う詩人だった。その夜、彼は私を彼の禅堂の裏の空き地に連れていき、ゴザ一枚のベッドを私に提供してくれたのだった。ゴザのベッドは、大地の温もりを私の身体にしみ込ませた。土の硬さが気持ちよく、満天の星を仰いで、木立を抜けてくる月の光のシャワーを浴びると、私の身体は、自由に宇宙遊泳をしているようだった。宇宙に飛び出した胎児のような感覚に包まれたが、背中の暖かさが母親の胎盤とつながる、へその尾のように感じられ、安心していることができた。

たった一晩の経験であったが、このときを境にして、私の人生は大きくカーブしていく。ゲリーは私に、宇宙を見せることに成功したのだ。そして、そのときから私の東洋への彷徨が始まった。もし、彼と出会わなければ、日本人でありながら東洋を知らない、ID 無しの東洋人として今も過ごしていたに違いない。

それから間もなく日本に戻った私は、東洋と接する道を東洋医学に求めた。鍼灸学校を卒業した私は、自分の ID を確認すべく、再びカナダに移り、治療に精を出してきた。今の私には、日本はゲリー・シュナイダーのところで感じた土の暖かさ、そして北米は自由に泳ぎ回る空間のように思える。^(ママ)十一年間の治療中に、たくさんの先輩や友人、患者さんと巡り会って、私と同じ思いを抱いている人々がいかに多いかを、膚で感じる事ができた。私は、『北米東洋医学誌』はこの様な人々の同人誌であると思っている。東洋を陰とし、北米を陽とする、陰陽の気が相互扶助して、この機関誌が誕生したのだ。地陰と天陽に加えて、ここに 40 名の北米人が会して、天人地の三才となった。

『北米東洋医学誌』と言っても、私たちのなかには、東洋も西洋も、北も南もない。あるのは、陰陽のバランスのとれた、健康な身体を作り上げ、健康的な社会の礎を作りあげるために、この機関誌があるという事実^(ママ)です。東洋医療に従事する人々が、広く学術交流し、そして、自分を啓発し磨き上げて行くためのスプリングボードに、この雑誌が成長するように念じるとともに、同人の諸兄に、一層のサポートと寄稿をお願いします。

NAJOM の初代編集長を務めたのが、スティーブン・ブラウン (Stephen BROWN) 先生。彼の存在なしには、NAJOM が最初から英語・日本語のバイリンガル誌として刊行できなかったのではないと思われる北米鍼灸界の宝。ブラウン先生は、1954 年和歌山県生まれ、14 歳まで日本滞在。1983 年に日本鍼灸理療専門学校卒 (奇遇にも水谷先生と同級生)、鍼灸師免許取得。1984 年北京中医学院にて研修。1985 年呉竹学園の国際鍼灸訓練プログラムで教えるかわら、芹沢勝助・間中喜雄らに学び、鍼灸関係の翻訳を始める。1986 年米国シアトルに移り、指圧・鍼灸施術のかたわら、鍼灸学校で講師を務める。現在もシアトルの鍼灸学校 Northwest Institute of Oriental Medicine で講師を務めるとともに、日本鍼灸および操体 (東洋医学に基づくボディワークの一種) の普及活動に余念がない。上記大会では、ブラウン先生の流麗な通訳ばかりでなく、日本経絡治療学会の重鎮、首藤傳明先生から直伝の鍼技のデモンストレーションもして下さった。

ブラウン先生による創刊号の編集後記には、NAJOM を取り巻く当時の北米における状況と日本鍼灸の特色が活写されている。それによれば、北米では相当な数にのぼる日本人治療家の大きな貢献にもかかわらず、全国規模の日本系東洋医学の団体又は出版物が無かった。そもそも日本式治療法は、東洋医学という枠組みの中で多種多様な治療法が切磋琢磨されながら発展してきた。日本医療界の近代化の過程で、鍼灸界も「科学化」によって統一的治療法を確立することを目指す動きがあった。しかし、現在に至るまで、いわゆる革新的な「現代鍼灸派」から古典的理論および伝統的療法に基づく「伝統鍼灸派」まで、群雄割拠状況が続いている。中国とは違って、日本には東洋医学を代表する機関がないことも、こうした事情に関係しているか

もしれない。

ここで、少し現代の鍼灸をめぐる世界動向の注釈が必要になる。2023年現在、世界で鍼灸といえば中医学といわれる現在の中華人民共和国が国家レベルで標準化した“新しい”「中国伝統医学（TCM：Chinese Traditional Medicine）」が隆盛を誇る事態となっている。日本のみならず中国でも近代化の中で“古い”「伝統医学」は一旦、徹底的に否定され、いわゆる西洋医学に基づく公的医療体制が確立された。その上で、文化大革命以降に「中西医合作」として“新しい”TCMが定式化され、これを中国は過去30年以降「戦略的輸出品」として国際標準化を図ろうとしている。

他方、WHOも1980年代以降、伝統医学戦略を打ち出しはじめ、それぞれの国の生活の自立と民主主義のために伝統的に民衆の間で行われてきた伝統医療の保護育成を促進する活動が広がってきた。2002～5年WHO伝統医学戦略を受けて、ラテンアメリカ諸国も各国の状況に応じた伝統医療保護のための法整備が急速に拡大した。ラテンアメリカの中でも保守的な土壌で知られているペルーでさえ、南米最古の国立大学サン・マルコス医学部で正規授業の中にハーブ（生薬）などの伝統医療に関する講座が設けられるようになった。

2008年にはWHO西太平洋事務局において、鍼灸治療に用いる経穴位置の標準化（Standard acupuncture point locations in the Western Pacific Region）が、中国・韓国・日本の専門家たちの協議の結果、発表された。現在、世界の鍼灸学校で教えられる経穴（ツボ）は、WHOで標準化されたものになっている。しかし、日本では鍼灸師などの東洋医学関係者が重要性を訴えた「日本伝統医学推進法」制定に向けた動きは決して活発化しているとはいえない状況にある。健康保険や医療費が大きな財政負担になっているにもかかわらず、である。

実は、ブラジルは国民医療の確保のために統合医療政策を採用し、中医学を導入。急速に医者をはじめとした医療資格取得者による鍼灸が普及しているが、そのバックには中国の国家的政治戦略が働いている。

さて、ブラウン先生のNAJOM創刊号編集後記に戻ろう。

この同人誌は、北米の東洋医学の従事者のために発行され、当然、その大多数は白人です。しかし私一人を除いて、発起人は全て日本人で、現在は、日本人が同人の多数を占めています。この様相は、北米東洋医学誌が治療家の間で更に知られ、同人が増えるに従って、逆転することは疑う余地がありません。日本伝統医学も日本人以外がこれを取り入れるにつれて、当然のことながら変容します。北米東洋医学誌はこの進化の過程を追い、かつこれを促す役割を果たします。

ブラウン先生の予言通り、NAJOM会員は当初40名ほどだったのが、10年後には300名を超えるものとなり、会員はアメリカ大陸のみならず、欧州諸国・イスラエル・豪州などの非日本人に広がった。これからも、日本鍼灸が世界各地で風土に見合った花を咲かせ続けるのが楽しみだ。

（たじま・やまわき・ちかこ／元文教大学国際学部教授・鍼灸 Vida Sana 代表）

文学の中のアメリカ生活誌 (79)

新井 正一郎

ジョニー・アップルシード (Jonny Appleseed) 19世紀の作家ソローが書いた『野生のりんご』の初めの部分に人間とりんごの関係をこう記している。りんごはおそらく「ギリシャからイタリアへ、そこからイギリスへ、そしてアメリカへ移動し、あの西部への移民たちがいまだに、種をポケットに入れたり、ことによったら荷物に苗木を結んだりして、夕日に向かって進んでいく。したがって今年は少なくとも100万本のりんごの木が昨年植えられたどの木より西部に植えられた」。りんごはアメリカで最も好まれ、話題にされた果物であった。りんごの木は開拓時代のニューイングランドの行商人とか開拓民によって定住した農地に植えられ、りんごの実は冬の終わり頃まで樽に入れて、新鮮なまま保存されるか、開拓地の dry house「乾物貯蔵室」で長期保存のために干されていた。その結果、1800年までアメリカ人は生活の必需品として、実に多くの種類のりんごを味わっていた。また、当時のアメリカの宿屋、居酒屋や多くの家庭での欠かせない飲み物は、りんごジュースや cider「りんご酒」だった。その理由は南北戦争が終わる頃まで、牛乳はコーヒーや紅茶に入れる以外は適さない危険な飲み物とみなされていたからだ。もちろん、りんご栽培のアメリカでの広がりとは唐突に起こったわけではない。むしろ、一人の風変わりな伝説的な男の地道な努力と切っても切れない関係がある。ジョニー・アップルシード (本名ジョン・チャップマン) がその人である。1774年9月26日、マサチューセッツ州レオミンスターで生まれた彼は、スウェーデンポリ派のキリスト教信者で、いつもやせた肩からつるした袋にりんごの種子を入れ、40年間教えを説いた冊子と一緒に、西部に赴く旅人たちに手渡していた。当時は、移住者や開拓者が馬車を連れ、新しい土地を求めてアレゲニー山脈以西の広大な空間に入って行った時期で、そのうち彼自らりんごの種を馬車に積み西部に向かった。馬に乗り、くりぬき丸太船で川を渡り、道中、適当な開拓地を見つけるとりんごの種をまき、開拓者の小屋を訪ねては一夜の宿を乞い、その礼にりんごの種の沢山入った袋とスウェーデンポリ派の教えを書いた冊子を置いていった。こうして大西洋沿岸から内陸部へ向けて旅をつづけていった。髭はのび、服はボロボロになり、旅の間は木の下で眠り、ただひたすらりんご栽培を続けた。亡くなる1845年にはインディアナ州にも延々と続くなだらかなりんご園を持っていた。晩年の彼は全く身なりをかまわなくなり、古いコーヒー袋に首と手を通す穴をあけただけの服といったいでたちで、インディアンにも敵意を抱かず、長い間せせとりんごの世話を続けた。彼は粗野でもあり野蛮でもある荒野を切り開き、「新しいエデン」(りんご農園)に変えたのだが、注目すべきは同じフロンティア・ヒーローである銃の名手ダニエル・ブーンとは違い、アップルシードは(武)力を使ってではなく、強い宗教的情熱によって第3代大統領ジェファソンが期待した農民の世界を作りだしたことだ。20世紀の革新派詩人カール・サンドバーグは彼の気高い姿をこう歌っている。「動きだす木々を植え／自らの名で大いなる太平洋までバーナムの森からダンシネインまでのように／ジョニー・アップルシードはあつというまに席けんした」。(常盤新平訳) それでは彼は多くのりんごの種をどこから手に入れたのだろうか。りんご酒醸造所からだった。

前記のように、アメリカではりんごは開拓時代から非常に好まれた果物だったことから、日常会話ではりんごという言葉が頻繁に使われる。1917年に採用されたニューヨークのニックネームである「大きなりんご」(the Big Apple)は1920年までには、いろいろな職業で「頂点を極める」ことを指して使われるようになった。例えば、ショー・ビジネスマンたちが成功の証としてマンハッタンの一流クラブで演奏するとか、競馬の騎手が多額の賞金のかかったレースに出場するなどの場合

である。1920 年後半にはこの種の仕事場がある地区とか主要街路、例えばブロードウェイやバワリー街の別名として使われるようになった。その後「ザ・ビッグ・アップル」は、この種の職業がニューヨークに集中していることから、1909 年にはニューヨークそのものを意味する言葉になった。

交通革命 (Transportation Revolution) 19 世紀初頭のアメリカには、郵便馬車が走る立派な道路網はボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボルティモアとワシントン間にしかなかった。他の道路は貧弱で、水路に通じる道として使われているにすぎなかった。河川沿いに入植が行われ、19 世紀に入っても河川、特にオハイオ川やミズーリ川など無数の支流を抱合してメキシコ湾に注ぐミシシッピ川は、人や物を運ぶためのハイウェイであった。人々は近隣の農家や市場に行く時も筏や川船で自然の水路を下っていたのだ。しかし、こういった乗り物で川を遡るのは別問題であった。川を遡る唯一の方法は、20 人から 30 人の男性が船にゆわえたロープを体にくくりつけ船の流れに逆らって引っ張りながら、土手道を踏みしめ歩くことだった。記録によれば、1807 年の 1 年間に、1,800 隻の筏や川船がミシシッピ川を下ってニューオーリンズに着いたが、上流に向かった船はわずか 11 隻であった。つまりミシシッピ川は一方通行の交通路だった。この状況を一変させたのが蒸気船の使用で始まった輸送革命であった。1807 年ロバート・フルトンはハドソン川で蒸気動力船の公開実験に成功すると、1811 年に蒸気船をミシシッピ川に導入し、以後 20 年間ニューヨーク航路とニューオーリンズ航路を独占した。1860 年までには西部水域には 6,000 隻の蒸気船が存在していた。ほどなく川沿いのすべての町が蒸気船の恩恵に浴した。セントルイスのニューオーリンズとの取引は倍増し、ニューオーリンズは 1835 年にはニューヨークを越す 5,400 万ドルの取引高をもつようになった。1807 年に始まった輸送革命は、1927 年以降は鉄道建設へと進んだ。1825 年には人工の水路であるエリー運河が開通すると、五大湖の汽船の航行は盛んになり、東部への移民を引き付けた。しかし、1828 年、ボルティモアが 350 万ドルの資本を集め、ボルティモア・オハイオ鉄道の建設に取りかかると、東部の都市のなかには水運に恵まれていても、ボルティモアのように鉄道輸送に乗り出した市もあった。列車の利点は、四季を通して運行できるだけでなく、船での航行が無理な場所にも鉄道会社は路線を敷くことができたという事実にあった。ニューヨークはエリー運河を有していたが、1820 年末鉄道を敷設し、フィラデルフィアとピッツバーグはペンシルベニア鉄道を建設し始めた。1850 年代までに、鉄道は東部の都市とシカゴを結ぶ主要鉄道をつなぎつつあった。1855 年にはシカゴは 10 本の幹線と 11 本の支線を集めていた。1869 年には大陸横断鉄道が完成した。さらにいえば輸送革命はコミュニケーション手段の改革や農業の発展や都市化を促し、アメリカのビジネスを組織的な世界にした。

二流のジャーナリストであったニューヨーク生まれのホイットマンが、1855 年に 12 篇の詩を収めた『草の葉』という壮大な詩集を出版できた理由は、若い頃に馬車や蒸気船を使って訪れ、3 ヶ月を過ごした南部の瀟洒な街ニューオーリンズとの遭遇にあると云われる。多文化的なニューオーリンズの古い地域には 18 世紀のフランスおよびスペイン様式の名残が漆喰の壁や鉄細工の装飾、アーチ、バルコニー、噴水などのある中庭に見られた。産業都市ニューヨークにはこの美しさはなかった。またこの南部の都市のみが劇場でオペラやショーなど芸術の世界を開いていた。しかも南部の魅力は外観の美とともに、『草の葉』の特色である肉感的なるものや原始性がみられたからでもある。南部での日々は楽しかったが、同行していた弟の体調が悪化したので、彼とニューオーリンズとの出会いは短期間で終わった。5 月下旬、彼らは汽船「草原鳥」に乗り込み南の都市を後にした。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

【実践報告】韓国外国語大学校ポルトガル語学科での講義

山田 政信

今年3月、韓国外国語大学校ポルトガル語学科（在ソウル特別市）で講義する機会を得た。外国語教育では、ネイティブの教員が教えるダイレクトメソッドは理想だが、学修者と同じ母語を話す教員が自身も学んだ外国語を教えることが多いだろう。しかし、今回筆者が行ったように、学修言語（ポルトガル語）と学修者の母語（韓国語）、そして教員の母語（日本語）が異なる言語教育の機会は珍しいように思う。外国語教育における変化球とも言える今回の講義がなされた背景と、韓国におけるポルトガル語教育や在韓ブラジル人などについて、筆者が知りえた限りの情報をもとに簡単に報告したい。

2年前のニューズレター（No. 84）で、筆者はコロナ禍のもとでWEB会議システムを果敢に駆使してグローバルにつながるブラジル人研究者・教育者について報告した。運よく筆者もそのうちいくつかのネットワークのメンバーとなり、少なからぬ知遇を得ることができた。今回の韓国訪問は、その頃知り合ったブラジル人言語学者アレシャンドレ・フェレイラ・マルチンス氏のおかげで実現した。

筆者が彼と知り合ったのは3年前のことだった。ポルトガル語教育に携わるブラジル人の研究者らが企画するシンポジウムがサイバー上で開催され、筆者は勤務校の授業について実践報告を行った。発表後、アレシャンドレ氏から連絡があり、フランスと日本のポルトガル語教育について意見交換などをした。当時、彼はフランスの大学院で博士論文を執筆中で、学部ではポルトガル語の授業を担当していた。そして1年経った2022年、彼は博士号を取得して、韓国の大学で教鞭を執るようになったのである。

実はこの2022年には、ブラジル外務省がポルトガル語の促進とブラジル文化を海外に広めることを使命とするギマラエス・ホーザ・インスティテュート (Instituto Guimarães Rosa) を設立している。これは、ポルトガルのカモンイス言語・国際協力機構 (Camões - Instituto da Cooperação e da Língua) やドイツのインスティトゥート・ゲーテなど既存の国際組織をモデルとしたものである。韓国外大がブラジル外務省にブラジル人教員の派遣を要請し、アレシャンドレ氏に最初の白羽の矢が立ち、ギマラエス・ホーザの教員として彼はソウルに移ることになった。

筆者が関りを持つブラジル人にはFacebookを活用している人が多い。アレシャンドレ氏とも知り合いになってすぐFacebookで繋がったのだが、驚いたことに筆者と同じ頃にブラジルに移住して、筆者と同じ屋根の下で生活を共にした旧知の長女と、彼は大学で友人だったことを知った。彼女は筆者がブラジルに住んでいた時期に生まれ、筆者の長女と1歳違いである。筆者は彼女の成長する姿をブラジルと日本で間近に見てきただけに、その驚きは大きく、彼の存在をより身近に感じるようになった。また、現在ブラジルで暮らす彼女とも久しぶりに話をすることができるようになった。アレシャンドレ氏との出会いがなかったら、このような再会は生まれなかっただろう。

そうした親近感も手伝って、アレシャンドレ氏となにか一緒にできることはないかと考えるようになった。そこで思い付いたのが、筆者が彼の大学で講義することだった。ニューズレター（No. 84）でも報告したように、コロナの間、筆者は数か国の大学で会話の授業（招待講演）をそれぞれZoomで行った。内容は筆者が調査してきた「移民と宗教」に関する講義を対話形式で進めるとい

うものである。そこで、今回はその内容を膨らませ、「ブラジル・韓国・日本 移民と宗教」というテーマで、3 国間の移民と宗教の変遷と現状を説明した。

準備の段階で得た新たな知見は、ブラジルへの初期の韓国移民は日本から日本人として渡った人々だったこと。1930年代にはキリスト教宣教師とみられる在日韓国人が独自のエスニックコミュニティを作っていたこと。そして、朝鮮戦争後の1956年に退役軍人らがブラジルに移住することで、コリアンとしてのエスニックアイデンティが強化されたということだった。韓国語で書かれた論文をネット検索し、グーグル翻訳を用いて一定程度の理解を深めるという新たな体験もできた。2年前に韓国行きを決めてから独学でハングルを学び始め、出発までの半年間は学生と一緒に韓国語の授業を受けたのだが、旅行中もほんの少しは役立った。

韓国の新学期は3月に始まる。筆者はアレシャンドレ先生の第1回目の授業で講義させてもらうことになった。受講生は新3年生の14名だった。ポルトガル、もしくはブラジルに留学した学生がそれぞれ1名おり、幼少期をブラジルで過ごしたという学生も1名いた。たまには英語を交える必要もあったが、留学未経験者でも筆者がポルトガル語で語る授業を概ね理解し、質問もしてくれた。ただし、積極的に手を挙げる学生は少数で、アジア系の民族性を感じさせる点は日本と変わりないと思えた。

韓国でポルトガル語学科を擁する大学は、韓国外国語大学校と釜山外国語大学校の2つである。大学校とは総合大学を意味する。韓国外大はソウル特別市のソウルキャンパスにポルトガル語学科、京畿道龍仁市のグローバルキャンパスにブラジル学科を持つ。しかし、後者は近年閉鎖する予定とのことである。なお、韓国外大ソウルキャンパスには、カモンイス言語・国際協力機構が置かれており、在韓18年のポルトガル人教員が同大学で授業の一端を担っている。

在韓ブラジル大使館では、ブラジル人子弟に継承語としてのブラジルポルトガル語の教育活動を2022年から開催するようになり、アレシャンドレ氏が担当している。筆者の滞在中に第2回目が開催され、5名の子供たちが保護者と一緒に参加した。ポルトガル語で韓国版「うさぎとかめ」の読み聞かせがあったが、その内容はイソップ物語とは異なる。興味のある方は、一度調べてみると面白いだろう。同行した妻が急ごしらえの折り紙教室を開き、筆者は子供たちを手伝った。文化担当の大使館職員カルロス・ゴリート氏によると、現在、韓国に在住するブラジル人は約1,500名。滞在資格は様々だが若い年齢層が多く、韓流ブームで国際結婚する例が増えている。カルロス氏もその一人である。彼の妻はポルトガル語と韓国語を駆使したチャンネルCoreaníssimaを運営する韓国人YouTuberで、登録者数は122万人。仲睦まじく、そして面白おかしく二つの国の文化を紹介する二人の姿はなんとも微笑ましい。彼らはグローバル時代の架け橋のようなカップルといえる。

韓国外国語大学校は1954年に設立された大学で、東京外大や北京外大に匹敵すると評価される名門校。天理大学は1963年に同校と協定を締結した最初の外国の大学である。日韓国交回復は1965年だったから、それ以前からのお付き合いということになる。今年は締結から60年でちょうど還暦の年に当たる。そうした年月の積み重ねを思えば、筆者の試みはあまりにも小さな砂の一粒に過ぎない。とはいえ、雨垂れ石を穿つという譬えが論すがごとく、今後も小さな努力を続けることで何某かの化学反応が生まれるようになるかもしれない。今はそんな夢を見ながら前進している。

(天理大学アメリカス学会会長)

アメリカス学会第 27 回年次大会・パネル発表要旨

言語・文化継承は選択可能なのか？

－在日外国人集住地域を事例に－

大川 ヘナン

本発表では日本社会において、移民の親の言語・文化継承の難しさについて検討を行う。

これまで言語学や教育学の分野において、言語・文化継承は様々な視点から論じられてきたテーマである。移民研究においては、移民がホスト国において地位達成・教育達成を実現するための社会的要因が検討されてきた。ポルテス&ルンバウト（2001）のアメリカにおける研究では、移民家族の社会的成功を後押しする要因として、人的資本・編入様式・エスニックコミュニティの3点が挙げられた。そして、その中でもエスニックコミュニティに関しては、移民家族はホスト国の言語と文化のみならず、出身国の言語と文化の双方を保有することが重要であると論じた。そのため、ホスト国の言語のみならず、母語を伝えることの重要性が研究においても立証された。しかし、言語・文化継承の重要性及び必要性が立証されたとしても、一方で実際に言語・文化継承を行う移民家族の親が直面する社会的難しさにも目を向ける必要がある。そこで本発表では外国人集住地域で子育てを行っている移民家族の親にインタビュー調査を実施し、言語・文化継承における難しさのリアリティを明らかにした。

本発表では外国人住民が多く暮らす X 県 Y 市 A 団地で調査を実施した。A 団地は日本有数の在日外国人が集住している団地であり、2022 年時点で外国人住民は全体の 56.6% である。A 団地では外国人住民が集住していることもあり、制度的完備性（Breton 1964）が高い。そのため、積極的に日本語を習得したり、団地外とつながりを持たずとも生活を過ごすことが可能である。このような環境では言語・文化継承はより容易に達成することができると考えられるが、インタビュー調査を通じて、必ずしもそうではない現実が示された。

インタビュー調査から明らかになった内容は以下の通りである。外国人の親（本調査ではブ

ラジル人の親）は母語であるポルトガル語の重要性を認識しつつも、日本社会で成功を手に入れるためには日本語が必要であることが語られた。A 団地における外国人親の多くは工場勤務をしており、子どもたちが工場勤務のルールから脱出するためには教育達成、つまり大学進学が必須であり、それを達成するためには日本語能力が必要となる。そのため、外国人親は母語よりも日本語の教育を優先し、母語の継承の優先順位を下げていることが語られた。しかし、外国人の親たちは母語を蔑ろにしている訳ではない。日本社会における母語であるポルトガル語の市場価値は低く見積もられていると外国人親たちは認識しており、子どもが将来社会的な成功を手に入れるためには日本語そして英語が優先して学ばれる言語であると捉えている。そのため、言語・文化継承を行いたい外国人親でも、社会的成功と文化継承のジレンマに陥る実態が明らかにされた。

（大阪大学大学院人間科学研究科）

日本語・スペイン語の複数人会話における話者交替と発話の重なり―聞き手の反応を中心に―

市川 禎理

外国語学習者にとって、学習言語での会話のやり取りは、会話が進行する上で必然的に発話の機会が与えられる一対一の場面に比べ、必ずしも発話の機会が与えられるわけではない複数人会話において発言することの方が難易度は高い。発言するためにはより自発的な発話権の取得が必要となるが、話者交替時の行動の違いや会話スタイルの違い等が学習言語での発言を難しくする要因として考えられる。

Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) が提唱したターンテイキング（話者交替）システムによると、話者移行適切場所（transition relevance place）（以下、TRP）は、順番を構成する最小単位である順番構成単位（turn constructional unit）（以下、TCU）が完結可能な時点を指し、話し手以外の者が順番を取って話し始めてもよい場所とされている。言い換えれば、話者交替や聞き手による「あいづち」など、

会話参加者の発話が発生しやすい場所である。一方で、TRP 以外で発話が発生しないわけではない。他者の発話中に発話権を主張する「割り込み」や、発話権を主張しない「あいづち」等による発話は TRP 以外でも確認される。

本発表では、これらの TRP や「割り込み」等によって発話の重複が生じた部分に焦点を当て、会話分析の手法を用いて会話への参加の仕方や聞き手の反応について観察・分析を試みた。会話資料は日本人 3 名およびスペイン人 1 名による日本語会話、コロンビア人学生 4 名によるスペイン語会話で、それぞれ約 30 分の日常会話を録音し、そのうち 20 分を文字化して比較した。どちらの会話においても会話参加者は初対面ではなく、ある程度気心の知れた間柄である。自然な会話を収集するため、会話のテーマや条件は特に設定せず自由に雑談してもらった。録音データの文字化にはアノテーションツール ELAN を使用した。

分析の結果、会話時間に対する沈黙時間の割合は、スペイン語会話で 8.8% (2 分弱)、日本語会話で 4.1% (1 分弱) であった。また、各参加者の発話時間割合は、日本語会話で最も低かった者で 32.2% (約 6 分半)、スペイン語会話で 17.4% (約 3 分半) であった。

日本語会話では発話の重なりが非常に多く確認されたが、その多くは発話権を取得しないあいづち的発話によるものであり、あいづちを用いた、聞き手としての積極的な会話参加が認められた。また、発話権の取得にあたっては「割り込み」発話を回避する傾向が見られた他、話し手は間や抑揚等により TRP を自ら産出し、聞き手の反応を確認しながら会話を展開していた。さらに、話し手でありながら聞き手のあいづちに同調するような、あいづち的発話をするケースも確認された。

スペイン語会話では、発話の重なりも多くは聞き手による「割り込み」発話、或いは話し手による TCU の延長によるものであり、日本語で多用されるようなあいづちは聞き手の反応にほとんど見られなかった。また、話題が変わる際などには、各参加者は発話の重なりを生じな

がらも発話権を取得すべく挙って発言しており、発話権を取得する形での実質的発話による会話参加が好まれるようである。他者の発話に対する聞き手としての反応よりも、発話権取得の方が優先されていた。

本発表では母語話者複数名による日常会話の 1 つの事例を比較したのみであり、さらに広範かつ詳細な分析が必要であるが、少なくとも先行研究と概ね同様の傾向が認められた。

(関西外国語大学非常勤講師)

[引用文献]

Sacks, Harvey; Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail. 1974. "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation". *Language*, 50, No.4, Part 1, pp.696-735.

スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ —オンラインと対面学修の比較—

橋本 和美

漫才とは「ボケという滑稽なことを言う人とお客さんの視点に立ちストーリーを展開するツッコミの会話で笑いを生み出す話芸」と定義される。この漫才の「笑い」が学びを活性化させるしかけとして「教育」にかけあわせられ、「笑育(わらいく)」が誕生したのは 2007 年のことであった。「笑育」の中心となるのは「プロのお笑い芸人から漫才のしくみを教わり、学修者が二人一組で漫才づくりに挑戦できる漫才ワークショップ」である。同ワークショップは大阪の小中学校への導入を皮切りに、2014 年以降全国の教育機関へと広がりを見せている。

橋本(2023)ではオンラインでのスペイン語の授業における実践結果を省察し、漫才づくりが授業を活性化させる可能性を示唆した。本発表はその第二段階である。具体的には、オンラインと対面授業の学修効果の相違について、学修者の自由記述アンケート(学んだこと、気付いたことは何ですか)の結果をもとに質的分析を行うことである。分析には筆者の恣意的・主観的な解釈を回避することに配慮したフリーソフトウェア KH Coder を用いた。

分析の結果、「漫才を取り入れた授業」はオ

ンライン・対面授業ともに多少なりとも有効であり、特に「人間関係形成力」、「言語能力」、「総合力・複合力」、「スペイン語力」に寄与することが示された。

一方、オンラインと対面での異なる特徴も現れた。まずオンラインでは対面に比べて「スペイン語漫才の難しさ」や「不安」を感じる学修者、また授業後に「反省」の気持ちを述べるコメントが多く見られた。今後の課題として、オンラインでは授業担当者が学修者により寄り添う姿勢を見せて声かけをするなど精神的なフォローを心がける、また事前課題を準備して緊張感をほぐすなどの配慮が必要だろう。

ゲスト講師である「芸人さんからの学び」に着目すると、その価値をより大きなものと認識していたのはオンライン学修者であった。あくまで筆者の印象であるが、対面授業ではゲスト講師の存在感が常に近くに感じられることから、教室は終始賑やかで一体感のある雰囲気が出た。他方、オンライン授業では和やかな雰囲気が保たれていたが、スクリーンのゲスト講師が発言する際は、教室は静まり学修者らは私語を慎んで集中するなどメリハリが感じられた。オンラインと対面の相違は質問タイムに関する回答でも見られた。オンラインではゲスト講師のメッセージを人生の糧としてとらえたコメントが目立った。一方、対面授業では、真剣な質問を投げかけるには明るすぎる雰囲気だったのかも知れない。漫才づくりを非日常のイベントとして楽しむことはもちろん大切であるが、学修者の自己学修能力を高めるという点において、授業者が何らかのフォローをする必要があるだろう。

今回の調査は短期間の取り組みに基づいているため、その結果は必ずしも一般化できるものではない。また対象が初級スペイン語の学生に限定されているため、他のレベルや言語における効果については考慮されていない。今後はより多くの学修者を対象にした長期間の比較研究を継続し、対面、オンラインともにより効果的な教育方法を模索する必要がある。

(天理大学国際学部准教授)

米国ハワイ州の外国語教育“World Languages”プログラムから—外国語教師の関心の所在—

山本 享史

経済や情報、人の移動など、さまざまな点でグローバル化する中で米国では外国語教育への関心が高まっている。その理由のひとつとして外国語教育による知的刺激の重要性、複言語能力保持者の認知的優位性が広く認識されてきていることが挙げられる(大谷, 2012)。この外国語教育への関心の高まりは大学入学における外国語単位の要求や外国語に熟達した生徒を表彰する「二言語使用者の証(Seal of Biliteracy)」という制度にも見ることができる。大学進学を考えて教科「世界言語(World Languages)」(以後、WLと表記)の教科を選択する高校生は多い。

WLは、米国の中学、高校の91%で設置されているが、多くの調査や研究の課題が残されている。例えば、学区内における選択言語や受講状況の違いについて全米的な調査は進んでおらず、言語教師の認識や生徒の言語カリキュラム選択の動機等に関しても更なる研究が求められている(Baggett, 2016)。

ハワイは住民の民族的文化的背景において米国で最も多様性に富んだ州であり、ハワイの言語教育状況もまた多様な言語の置かれた社会状況に影響を受けているといえるだろう。

ハワイ州教育省は教育政策の柱の一つに多言語主義(Multilingualism)を据えている。その具現化の形のひとつが学校教育における教科WLの設置である。ハワイ州の多言語主義は他にもさまざまな形でプログラム化されているが、WLの設置は対象となる生徒の数という点において最も開かれたものだといえる。

筆者は現在、「ハワイの中学、高校のWL教員はどのようなことを考え、どのような教育実践をしているのか(どのようにつながりながらハワイの言語教育を支えているのか)」という研究課題を持って調査を始めている。

本シンポジウムでは、この調査へのアプローチとして現地の教員とのつながりを強め

るために 2022 年度に行った 2 つの活動、(1) ハワイ島ヒロ高校と天理高校の生徒交流会の開催、(2) Hawai 'i Association of Language Teachers (HALT) 開催行事について紹介した。

研究協力者となるハワイの外国語教師の多くは州の WL 教育を支える外国語教師の会である HALT に所属し、情報交換の推進と指導力向上を図っている。外国語教師の認識を探る皮切りとして、2010 年以降の HALT 開催行事のテーマを概観すると、社会的公正の実現をめざす立場としての言語教員や学校の役割に関するものが多く、(1) 文化、言語の多様性となつたり、(2) 社会構成員としての学習者育成を目指す指導、(3) ICT による指導革新が関心の大きな柱になっていることがわかる。HALT は外国語教師の勉強会ではあるが、指導技術の共有という側面を越えて、ハワイ社会の構成員である生徒たちがよりよく生きる人々の社会を実現していくために、言語教師には何ができるのかを探し求めているように思われる。また、島嶼州という地理的要因から比較的早く学校教育への ICT 導入が進められ、活用の工夫が試みられてきた様子がわかる。全米で唯一、ひとつの教育委員会の元に学校教育が統括されている州であるハワイは、文化的多様性を視野に入れた学校教育研究を進める上で私たちが考えるべき多くの事例を提示してくれると思われる。

今回の発表の内容は HALT 行事の表面的な部分とハワイ WL 教育研究の入口に立とうとしているという筆者の状態についてお話ししたに過ぎないが、これらをきっかけとして先述した研究課題に基づく今後の調査、研究へと進んでいきたいと考えている。

(天理大学国際学部准教授)

[引用文献]

- 大谷泰照 (2012) 『時評 日本の異言語教育—歴史の教訓に学ぶ—』 英宝社.
- Baggett, H, Carson. 2016. "Student enrollment in world languages: L'Egalite des Chances?" *Foreign Language Annals*. Vol.49(1), 162-179.

日本の大学生の 4 年間の英語学習モチベーションの変化

小林 千穂

モチベーションとは、学習の理由や目的、意欲・努力の大きさ、努力の持続という 3 つの要素に関わる概念であるが (Dörnyei & Ushioda, 2021)、3 つめの要素、つまり「どれぐらいそれをやり続けるか」という問いは、言語学習モチベーションの分野ではあまり関心を集めてこなかった。しかし、言語学習の成功には学習者の長期的な努力が不可欠であるため、この 3 つめの要素についての検討が求められる。そこで、本研究では、2022 年 4 月にある私立大学の英米語専攻に入学した 44 名の学生を 4 年間追跡し、彼らの英語学習に対するモチベーションや態度の変化を調査する。本研究は 2026 年の 3 月まで継続する予定であるが、本発表ではデータの収集・分析が終了している入学時と 2022 年春学期終了時に実施した調査の結果を報告した。

本研究では、L2 動機づけ自己システム論 (L2 Motivational Self System) (Dörnyei, 2005) の枠組みに基づいて、学生の英語学習モチベーションや態度の変化とその理由を探る。本研究の具体的な研究課題は、①日本の大学生の英語学習に対するモチベーションや態度は 4 年間でどのように変化するのか、②日本の大学生のモチベーションや態度に変化をもたらす要因は何か、③日本の大学生のモチベーションや態度は彼らの英語力とどのように関係しているのかの 3 つである。対象となる 44 名の学生は、入学時に ACE Placement Test を受け、その点数に基づき A, B, C の 3 クラスに分けられた。この 44 名の学生に対して、入学時と卒業までの各学期末に、英語学習に対するモチベーションや態度に関連する 17 因子について問う 70 項目からなるアンケートを実施する。また、約 15 名の学生に対して、アンケート調査に続いて、関連する内容の半構造化インタビューを実施する。

調査の結果、習熟度別編成の全てのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対して高い

モチベーションと好意的な態度を持って英米語専攻に入学してきたことが分かった。また、ほとんどの調査協力者は、在学中に留学したいという強い希望を持ち、卒業後は英語を活かせる職業に就くことを強く希望していた。一学期終了後、全てのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対する高いモチベーションを維持することができた。また、ほとんどの調査協力者は、英語を使う自己をより具体的に描けるようになり、英語学習に対する態度がより好意的になった。留学したいという気持ちや英語力を必要とする職業に就きたいという気持ちはより強くなった。

学習意欲高揚要因には、英語、英語圏の文化、コミュニティへの興味、英語授業への満足感、クラスメート、教員、先輩などの他者の影響、留学や将来のキャリアへの展望などが含まれ、他方、学習意欲減退要因には、新しい環境への不適応、部活動やアルバイトなどの他の活動への関与、選択した専攻への迷い、英語授業への不満足などが含まれた。

結論として、英語を専攻する学生のほとんどが、英語力に関係なく、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って入学し、一学期終了後、彼らの英語学習に対する好意的な態度はより好意的になり、高いモチベーションは維持されることが明らかになった。これは、恐らく、新しい環境へのわくわく感がまだ持続しているためだと考えられる。しかし、時間の経過とともに、学生のモチベーションに差が現れることが推測される。英語力の着実な向上とそれに伴う自己肯定感の上昇が、彼らの今後のモチベーションの維持にとって重要になることが推測される。

(天理大学国際学部教授)

[References]

- Dörnyei, D. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, D., & Ushioda, E. (2021). *Teaching and researching motivation* (3rd ed.). New York: Routledge.

お知らせ

◇来る7月22日(土曜日)午後1時から次回定例研究会を開催する予定です。詳細は6月末に本学会ホームページに掲載します。多数のご参加をお待ちしています。

◇学会誌『アメリカス研究』(電子ジャーナル)は本年も11月末に第28号の刊行をめざして準備を開始しております。ご投稿をお考えの会員諸氏におかれましては、投稿規定ならびに執筆要項を学会ウェブサイト上にて7月初旬にはご案内させていただく予定です。この機会に日頃のご研究成果をぜひともお寄せいただけましたら幸いに存じます。

◇当学会の年会費は、一般会員は5,000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

編集後記

◇今号の巻頭言を飾ってくださった田島(山脇)先生は、長らくペルーの食文化やデカセギの研究で諸学会を牽引してこられました。鍼灸師になられてからも、その分野で果敢にアメリカスを行き来される姿は地域研究者そのものです。ダイバーシティが注目されるなか、教育者・研究者の在り方には柔軟性が求められていると感じます。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 88 : 2023年6月23日発行)

発行者: 山田政信

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>